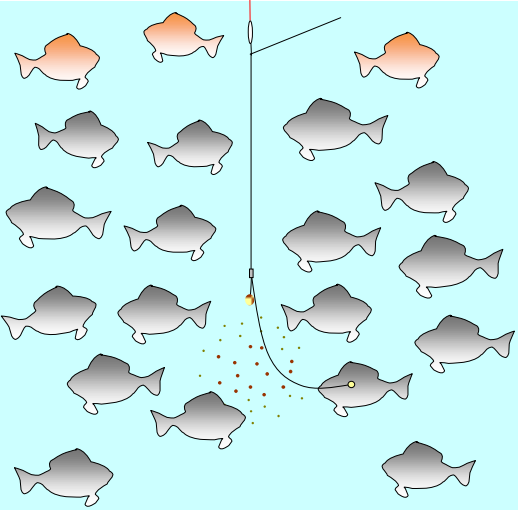


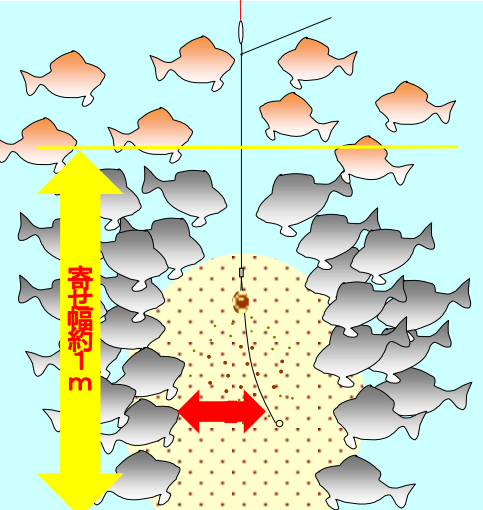
浅ダナウドンセット釣り水中イメージ【3ステップ解説図】

エサ打ち前



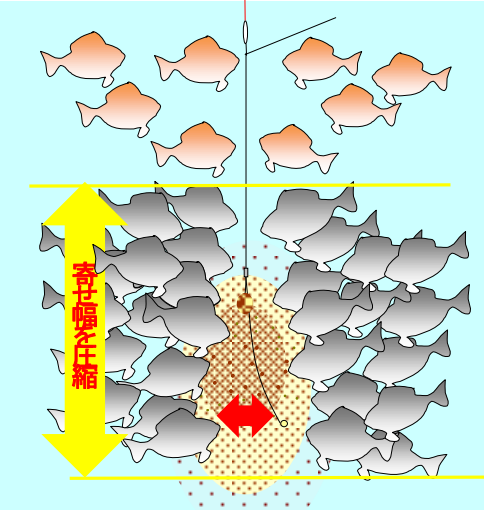
エサ打ち前の浅ダナのへら鮎は、密度がまばらでフリーに漂っている感じ。タナ規定のある釣り場、水面下1mよりも上にガサベラが居着き、それよりも下に放流直後の新ペラと、旧ペラでも比較的コンディションの良い良型のゾーンが存在する。
よっていきなり開くバラケを大量投入すると、ガサベラが素早く反応し、場合によっては狙いの1mのタナに入ってきてしまうという釣りになってしまう。このためやや開きを抑えたバラケで時間をかけて寄せ、ヒット率の高いアタリができるようにするのがポイント。

第1ステップ



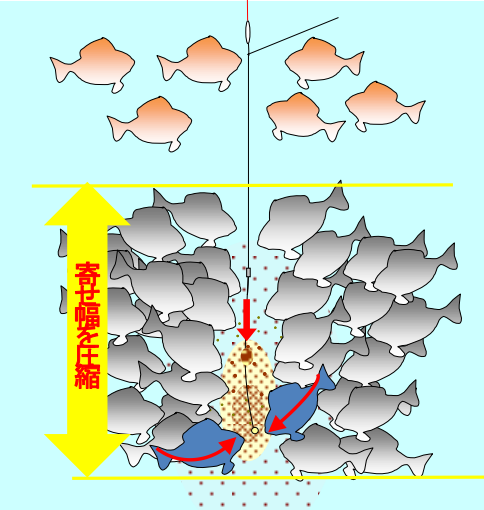
丁寧になじませテンポの良い打ち返しを繰り返していると、次第にバラケエサの拡散するエリア周辺に寄って来る。このときの水中イメージはオモリの位置(水面下1m)を中心に上下50cm程の幅(トータルで概ね1m)の範囲に寄りが集中する。しかしクワセに対しては以前距離感を保ち、容易に吸い込もうとはしない。ウキにはサワリというにはあまりにも弱々しい動きが表れるが、このままでは突発的にアタリができることはあっても、コンスタントに食いアタリができるには至らない。この時点では、この動きを見逃すことなく次のステップに進むことが肝心。

第2ステップ



このステップではタナに寄ったへら鮎をクワセに近づけることを目的とする。そのためにはバラケのタッチのボソ感をわずかに控え、バラケ粒子の横方向への広がりを抑えるのが効果的。具体的には別ポウルに基エサを取り分け軽く手水を加えてから10~20回攪拌し、バラケをしっとりさせつつ僅かに粘り(ハッキリとはわからない程度)を加える。このバラケをハリのチモトをしっかり押さえて打ち込むと、徐々にサワリがハッキリしてくる。万一気配が無くなるという逆の症状が見られた場合は、まだ寄り不足と判断して「第1ステップ」に戻る。

第3ステップ



サワリが明確に表れるようになったら、食い気のスイッチを入れるためのきっかけを作ってやる。それがタイミングの良いバラケの抜き方。バラケがタナに届いた直後に抜けるパターン(最短)から、なじんだまま10数秒じっと耐えてから一気に抜けるパターン(最長)までをタイミングに差をつけて試して、最もアタリが良くできるパターンを探る。タイミングが合うと興味を示したへら鮎がバラケに誘われクワセに飛びついてくるが、アタリが続かない場合はパターンが異なる可能性があるため別のパターンを探り、安定的な時合いの構築に努める。